



語られ、耳で聞かれてきた文芸

口承文芸学者
小澤俊夫

昔話は口伝えの文芸であるといわれますが、口伝えとは耳で聞かれてきたということです。この事実が大切で、私たちはこれから、二つのことを学ぶことができます。

耳で聞きやすい

第一は、昔話は、耳で聞いて分かりやすい、シンプルでクリヤーな文体を獲得してきたということです。ここが、目で読むために書かれた創作文学と違うところです。子どもたちに昔話を読み聞かせるときには、なるべくシンプルな文章のものを選んでください。昔話は、出来事を速いテンポで語っていくものであって、風景や人物の気持ちを感情移入的に、詳しく語るものではありません。

そして、同じ場面は同じ言葉で語るものです。子どもにとっては、同じものにまた出会うのは、とてもうれしいことです。子どもは同じお話を何回も聞かせてくれと言

うし、同じ絵本を何回も見たりします。これは、子どもの魂の安定した成長にとって大切なことで、昔話はそれを知っていて、同じ言葉を繰り返すのです。

昔話はまた、話のリズムを大事にします。特に、出来事を三回繰り返すことを好みます。その典型的な例が、グリム童話の「白雪姫」です。白雪姫は、悪い女王によって三回殺されます。最初は紐で、二回目はきれいな毒の櫛で、三回目は毒のリンゴで。グリム兄弟はこの三回の出来事をほとんど同じ言葉で繰り返しています。そして、生き返らない三回目がいちばん重要で、そこにアクセントが置かれているといえます。つまり、「タン、タン、タン」というリズムなのです。子どもが耳で聞くとき、このリズムの楽しさも一緒に感じてもらいたいと思います。昔話は耳で聞く文芸なので、音楽ときわめて似た性質をもっているのです。音楽では、この形をパーフォームと呼びます。

昔話は時に残酷な場面を語りませんが、決して残酷には語りません。「馬方やまんば」という話では、馬の脚が切られますが、決して血が流れたとは語られず、馬は平気で駆けていきます。「手なし娘」では娘が両手を切り落とされて追い出されますが、血が流れたとは語られず、娘は子どもを背負って平気で歩いていきます。そして、子どもが水に落ちそうになると、あつという間に娘の両手は回復し、子どもを抱き留め、また平気で歩いていきます。決してリアルに、血なまぐさくは語らず、まるで切り紙細工のように語るのが昔話です。

そして残酷な出来事は、主人公が最後に幸せに至るための途中の試練なのです。子どもはお話を聞いたり読んだりするとき、自分を主人公と重ね合わせてお話を体験していきます。そういう子どもにとって、途中で怖いことがあっても、主人公が話の最後で幸せになれば、それで満足なのです。では、その幸せとは何か。広くいろいろ

な民族の昔話について調べたことがありますが、共通しているのは、まず主人公の身の安全です。そして富の獲得。第三に結婚です。それらが結合している場合もあります。

生の声の魅力

耳で聞かれてきたという事実から私たちが学ぶことのできる第二は、語ってくれる大人のごく近くにいた幼い聞き手は、安心感を持ち、その人に愛されているという実感をもつことができたということです。語ってくれる大人の生の声にも支えられたことでしょう。体温が感じられるほど近くにいることと、生の声の魅力が大切なのです。近頃はテレビがあり、DVDがあり、スマートフォンがあつて、子どもたちの耳に機械を通じた声で物語が届けられることが多いでしょうが、本当に大切なのは人間の生の声です。親をはじめ自分の身の回りにいる、大人の生の声が子どもの成長を支えているのだと思います。

昔話も、ぜひ生の声で聞かせてやってもらいたいと思います。子どもがお話を読んでもみんなで聞くのもいいでしょうし、先生が読んでみんなで聞くのもいいでしょう。

昔の学校では、雨で体育ができないと、先生がお話を読んでもくれることがありました。それは子どもにとって大きな喜びでした。子どもはお話を言葉で聞きながら、登場人物や場面を頭の中で描いてみえています。つまり、言葉から絵への変換をしているわけです。その変換する力を養うことが大切だと思えます。この創造的な想像力は、生きていくうえであらゆる場合に必要な力です。この力を養うには、ただただお話をたくさん聞くことが必要です。相手の話を集中して聞けること、これはあらゆる学力の基礎であることは自明です。

ただ私は、学力をつけるためにお話を聞かせてください、とは言いたくありません。何よりもまず、子どもがお話を楽しんで聞くことが大切だからです。そして、昔話は聞いて楽しめる文体なので、そういう本を選んでやってほしいし、先生が生で読んでやってほしいと思うのです。

本になっっている昔話は、ほとんどが共通語で書かれていると思いますが、先生が、その土地の日常の言葉（いわゆる方言）に直して読んで聞かせたら、なおすばらしいと思います。昔話は本来、それぞれの土地で、その土地の日常の言葉で語り伝えられてきたのですから。ただし、わざと作った

「方言みたいな言葉」はやめましょう。本当のその土地の言葉は、どの子どもにとっても、自分が育った土地の風景や水や空気と同じものなのです。昔話は私たちの祖先が、何百年も口伝えしてきた伝承文化です。私たちはその伝承の途中にいます。だから、なるべく壊さないでこれからの世代に伝える責任があると思うのです、自然や水や空気を守るのと同じように。

おざわ・としお

中国長春生まれ。口承文芸学者。筑波大学名誉教授。グリム童話の研究から出発し、マックス・リュティの口承文芸理論を日本に紹介。その後、日本の昔話の分析的研究を行い、昔話全般の研究を進めている。1998年、独自の昔話研究と実践、若手研究者の育成を目的として、「小澤昔ばなし研究所」を設立。季刊誌「子どもと昔話」を刊行し、昔話の研究と語りの現場を結び付ける活動を続ける。

